

# バウムテストの幹先端処理について II

—提唱以後の研究動向—

佐渡忠洋<sup>1, 2)</sup>・鈴木 壯<sup>3)</sup>

On Apical Termination in the Baum Test: Part II  
-Research Trends Since 1971-

SADO Tadahiro and SUZUKI Masashi

## Abstract

The objective of Part Two of this review on apical termination in the Baum test in Japan was to outline research development trends since 1971. Specifically, we examined three schools of thought to assist in our understanding of the history of apical termination. First, the typological school used apical termination to categorize the Baum in a holistic manner. Second, the developmental school emphasized apical termination as a method of understanding the Baum as represented by children; thus, changes in their drawings of the apical termination coincided with their development. Third, the image school considered apical termination as the starting point for viewing the imaginal in the Baum. From those three trends, we drew 10 perspectives that describe the history of the apical termination-like family tree. Future research should focus on the advantages and disadvantages associated with these various perspectives, the need to build a concrete theory for interpreting Baums, and the importance of research that considers the drawing processes.

キーワード：分類法・三つの動向・今後の課題

Key Words: classification, three trends, future's issue

## I はじめに

第1報において筆者らは、幹先端処理 (apical termination) とは何かについて整理を行った。その中で、原則となる考えを提案し、これに「全体 ⇄ 部分」の記号を当てた。「全体 ⇄ 部分」は、幹上部の表現様式をバウム全体との関係下で読み解くもの、として幹先端処理を規定するものである。本論文では、提唱された1971年以後、どのような研究がなされてきたかを概観し、整理する。最後に今後期待される研究課題についても論じていきたい。

## II 提唱以後の3つの動向

幹先端処理の研究は、さまざまな領域と角度から行われてきた。それらはいずれも、各研究

者が自らの経験をもとに、藤岡らの原典が抱える課題を克服し、発展させ、実践する試みと理解できる。複雑に入り組む現状を捉えていくためには、一定の枠組みが必要となろう。そこで筆者らは、提唱以後を大きく「類型派」「発達派」「イメージ派」という3つの動向に分けて整理することを提案したい。これらは、幹先端処理の提唱を幹上部というアナロジーで考えた時、そこから伸びる3つの主枝のようなものである。

「類型派」とは主にバウムを類型化するための基点として幹先端処理を用いた動向、「発達派」は発達にともなうバウムの変化を捉える糸口を幹先端処理に求めた動向、「イメージ派」は主としてバウムのイメージ性を幹先端処理か

1) 岐阜大学保健管理センター/Health Administration Center, Gifu University

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科/Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

3) 岐阜大学教育学部/Factory of Education, Gifu University

ら読み解こうとする動向，である。この分け方は，研究者が何を重視し，どの研究者から影響を受けたか，という点から行われている。もちろん便宜上のものであって，各動向には重なりと繋がりはある。

以下，3つの動向とそこに含まれる10の視点を取りあげる。各視点の名称には代表となる研究者の名前を用いた。レビューは「全体⇌部分」から行うが，微妙な問題がある場合はその都度触れることにする。ただし，紙幅に限りがあるため，類型名（項目名）の基準や図例は記さなかった。詳しくは引用論文を参照されたい。

### Ⅲ 類型派

ここで整理するのは4つの視点である。

#### 1 藤岡らの視点

藤岡ら(1971)の業績は，第1報でまとめているので繰り返さない。この視点は幹先端処理の嚆矢であるから，「発達派」と「イメージ派」は本来ここから枝分かれしたものと理解すべきだろう。しかし後の研究で，藤岡らの視点は類型的な検討を行うために採用されてきた傾向が強いので，「類型派」の一つと数えることにした。

藤岡らの業績は，日本の研究に大きな影響を与えたと考えられるが，意外にもこの視点をそのまま用いた研究は少ない（曾我ら，1980；川崎，1984；曾我，1989；窪田，1991；澤田ら，1992；水田，1998）。その中でも，「幼型」と知的能力との関連を示唆した原ら(2000)，摂食障害を病型からも詳しく検討した水田ら(2000)の報告は，他の視点でもなされていない貴重な取り組みである。

#### 2 青木の視点

青木健次は，学生の心理的問題とバウムとの関連を検討した論文において，新しく幹先端処理の項目を定めた（佐藤ら，1978）。それは藤岡らに従って分類する「樹型」と，幹上部の形態を部分的に捉える「幹端に関するもの」という独自のものからなる。まず，「樹型」には，「基本型」「冠型」「放散型」「ヤシ型」「エダのみ」「その他」という項目がある（「エダのみ」は後で述べる吉川の研究から取り入れたもので

ある）。それぞれの基準は青木(1988)の中で触れられている。一方，「幹端に関するもの」には「開放」「鋭閉」「ツクヌケ」「放散」「直閉」「ものかげ」「その他（幹のないものetc.）」の項目があり，それぞれの基準は佐藤ら(1978)や青木(1980b)で記されている<sup>註1</sup>。「幹端に関するもの」の「開放」は狭義の「幹上開」に，「直閉」は「幹上直」に概ね読み替えることができるだろう。

幹先端処理研究をレビューする本稿の目的からすれば，「樹型」のみに注目し，青木の視点は藤岡らの視点に含まれるものと理解すべきかもしれない。しかし，この視点の特徴は，バウム全体と幹上部の部分的形態とを分けて考える点にあり（この問題については第1報で論じている），後の研究でも頻繁に採用されてきたため，一つの独立した視点と考えた。全体と部分とに幾分の隔りがあるため，「全体⇌部分」を満たしているとはいえない。

この分類法を用いた研究はかなりあり，特に大学生を対象とした調査研究で頻繁に採用されている（青木，1980a，1982；青木ら，1980；森谷，1983；福島ら，1984；中村ら，1985；中村ら，1986；小川ら，1986，1997；小川，1988，1995；綱島，1992；近藤ら，1996）。知見は相応に蓄積されているが，「基本型」「放散型」「冠型」を混同していると思われる報告もあるので，結果は注意して読み取らねばならない。

#### 3 小林の視点

小林敏子は，共同研究者とともに高齢者のバウムに関して詳しい報告を行いつつ（一谷ら，1986；小林，2000など），幹先端処理に関する独自の指標を打ち出した（小林ら，1982）。この報告に新しいデータを加え，僅かに指標を修正した『精神神経学雑誌』掲載論文に従って，ここでは概観する（小林，1990）。

彼女の視点は，「幹先端完全処理」「幹上を冠がおおう」「幹先端一部処理」「幹先端完全開放」「幹先端処理判定困難」の項目からなる<sup>註2</sup>。この報告で彼女は，高齢になるにつれて「幹先端一部処理」と「幹先端完全開放」が増えること，すなわち，高齢者は輪郭の開いたバウムを描きやすいことを見出した。この結果は，後に坂口

ら (2005a, 2005b, 2006) の追試によって裏付けられており、現在までの知見は滝浦 (2011) によって整理されている。

この視点は加齢とバウムとの関連を検討する中で創案されたものであるから、「発達派」に置くこともできよう。しかし、この指標の利点は輪郭把握に長けている点であるから、「類型派」に位置づけた。やや全体を強調し、部分への配慮が稀薄な視点でもある。

#### 4 濱野らの視点

濱野清志を代表とする研究グループは、発達と文化に関する広範囲な調査を行い (濱野, 2007b, 2008; 杉岡, 2010 など), それらの成果をまとめた報告書 (濱野, 2007a) において独自の視点を提案した。

彼らは、各国で調査した 7~29 歳のバウムを「幼形」「幼形移行」「筒型」「基本型」「ヤシ型」「放散型」で分析する (ただし、分類が困難なバウムは対象から除外しており、後述する「メビウスの帯現象」は別に項目を立てて分析している)。これらの項目は、藤岡らの視点を発展・微修正したもので、後述する吉川の視点を取り入れたものであるから、「発達派」との重なりが最も多い「類型派」の一視点と理解できよう。各項目の基準は、同報告書の 27-28 頁を参照されたい。また彼らは、「シュート」という「ヤシ型の樹木の幹の上端にまっすぐ上に伸びている新しい葉芽」にも注目しており、「実際にヤシの木を身近に感じながら暮らしていなければ、このシュートを描くことはほとんどないと言ってよいだろう」(45 頁) と述べている。これは、多文化的調査だからこそ得られた知見である。

濱野らの視点をを用いた研究はこの報告書のみであり、続く研究は今のところない。本報告書は入手も難しいので、更なる検討を加えて書籍等の形で刊行されることが期待される。

### IV 発達派

ここに位置づけられる視点は 2 つである。

#### 1 吉川の視点

吉川公雄は、バウムテスト研究に熱心に取り組み、一貫して幹先端処理を重視した (中尾ら, 1974, 1975, 1978, 1979, 1980, 1981, 1982,

1983, 1986, 1987; Yoshikawa, 1976, 1985; Yoshikawa et al., 1983; 吉川, 1978a, 1978b, 1978c, 1985; 吉川ら, 1979; 岩城ら, 1978, 1980, 1982, 1983; 久保ら, 1983; 長野ら, 1983)。彼の視点は研究を重ねるにつれ発展・微修正されおり、そのことは佐渡ら (2010) で整理された。

吉川の基本姿勢は、発達に伴って変化するバウムを幹先端処理から詳細に捉えようとするものである。項目としては、「幼児不定形」から「幼型」(類幼型, 類バナナ幼型, 類ヤシ幼型, 類基本幼型, 類冠幼型, 類人幼型, 類放散幼型を含む) と「人型」を通り、「未熟型」(幼型的バナナ型, 幼型ヤシ型, 幼型的基本型, 幼型的冠型, 幼型的放散型を含む) へ、そして「前成人型」(バナナ型, ヤシ型, 基本型, 冠型, 放散型を含む) を経て「成人型のバウム」へと至ると仮定されている<sup>注釈 3</sup>。これは藤岡と共同で打ち出した当初の類型に修正を加えたもの、とりわけ「幼型」を細分化したものであろう。ただし、各項目の基準は曖昧で、明文化されてはいない。

この視点をを用いた研究は、吉川以外には 1 編しかない (Sivapakianathan, web site)。吉川自身が行った膨大で広範囲な研究において、収集したバウムはほとんどが論文内に掲載されているため (印刷は荒いけれど)、この視点の有用性は今後再検討しやすいだろう。他の視点からそれらのデータを細分類する報告も期待できる。

#### 2 中島の視点

中島ナオミは、藤岡と吉川に影響を受けつつ、幹先端処理に関する自らの考えを発展させた (中島, 1983, 1984a, 1984b, 1986, 2008a, 2008b; 中島ら, 1982)。ここで取りあげるのはもっとも新しい彼女の博士論文である (中島, 2011, 109-157 頁)。これ以前の彼女の研究とこの最新版とでは、項目に大きな違いがあることは注意を要する。

彼女は藤岡らがバウム類型において輪郭よりも幹先端の表現を優先していることを問題視し (第 1 報参照)、「輪郭を描く行為には『幹先端処理の放棄』以上の何らかの意図が含まれ、輪郭

の有無や輪郭の描かれ方に描き手の心理的特徴が表れている」と考え、バウムの「輪郭の有無を樹型分類における第一の視点とし、幹の先端の処理様式を副次的に扱う」分類法を創案した。それは「樹型」(14個の類型に「その他」と、「幹先端処理」(幹上部の様式を捉える12項目)からなる。この視点は、青木の視点と同じく、全体と部分という2つの軸で理解しようとするものである。したがって、「全体⇄部分」が意図するところからはやや外れ、項目数は多い。子どもの微妙な表現の差を理解するために、このように設定されたのかもしれない。

中島の視点をを用いた研究は1編あったが(岩川ら, 1993), これは彼女の旧分類法での研究である。したがって、最新版での研究は、中島自身による発達過程と性差を検討した1編のみである。現在、子どもの調査研究は難しくなってきた研究者はいないだろう。詳しい検討とともに書籍として刊行されることを望みたい。

## V イメージ派

ここではまず山中康裕の業績を紹介した上で、3つの視点を整理することになる。

### 1 山中の視点

山中は、1975年に「メビウスの木」に関する学会発表を行い(山中ら, 1976), 翌年それを論文化した(山中, 1976)。この報告は、所謂「開放型」のバウム理解を躍進させたので、紹介と整理は詳しくしておくたい。

山中は、藤岡らの「先端開放型」、Kochや高橋、斎藤の「先にゆくほど太くなる幹」、高橋の「分離した木」を、「漏斗状幹上開」という指標にまとめた(図1-左)<sup>註4)</sup>。さらにその中には、「メビウスの木」という「幹の上端が開放している為に、幹として引かれた線がそのまま枝に移行してしまい、幹の部分においては、内側に内空間を形成していた曲線が、そのまま上部では枝として外空間を形成してしまう」バウムが認められることを論じ(図1-右), その空間逆転を「メビウスの帯現象」と名付けた。この論文を掴む上で、次の2点を忘れてはならないだろう。それは彼が、「『メビウスの帯現



漏斗状幹上開                      メビウスの木

図1 漏斗状幹上開とメビウスの木

(山中, 1995より)

象』を呈する場合、非常に不思議に思われることは、描いた当人は、この木の持つ奇妙さに全く気づいていない」とあるように、描き手の描画時の様子にも注目している点と、「治療の進展により、妄想幻覚状態を乗り越え、患者が reality を獲得するに従って、消失し、上端は閉じていく」と、治療的経過論にも言及している点である。

山中は経験的な出現頻度として、「漏斗状幹上開」は「正常者及び神経症ではほとんど全くと言っていい程みられない」が、統合失調症と非定型精神病で5~10%, 躁うつ病で1%内外, 「いずれも急性期の錯乱ないし昏迷を離脱した時期に最も多く、分裂病では慢性期にも認められる」と述べている。この「漏斗状幹上開」と「メビウスの木」の解釈仮説は、トポロジーや自我境界、自我構造、アイデンティティーなどとの関連で論じられており。詳しくは彼の他の業績を参照されたい(山中, 1980, 1995, 1999, 2003, 2005)。

「漏斗状幹上開」と「メビウスの木」からバウムを検討した研究はいくつかある。有意差検定を行った研究知見をまとめたのが表1である。諸研究の出現頻度を整理すると、「漏斗状幹上開」が統合失調症で約10%, 非臨床群で約5%, 「メビウスの木」が統合失調症群で約10~13%, 非臨床群で約3%, ICD-10の「精神及び行動の障害」に該当する群で3~7%となる。その他にも、「黒-色彩バウムテスト」(名島ら,

表1 「漏斗状幹上開」と「メビウスの木」の研究のまとめ

「漏斗状幹上開」 知見		研究
統合失調症群 ≡ 非臨床群		宮崎ら (1987a, 1989), 道又 (1993)
男性の統合失調症群 ≡ 女性の統合失調症群		宮崎ら (1987b)
-----		
小学1~6年の横断研究で出現率に有意差あり (田崎ら, 1991)		
「メビウスの木」 知見		研究
統合失調症群 > 非臨床群		森田ら, (1998)
統合失調症群 > 気分障害群		森田ら, (1998)
統合失調症群 > 急性一過性障害群		五十嵐ら (2001)
統合失調症群 > アルコール障害群		森田ら, (1998), 五十嵐ら (2001)
統合失調症群 > 神経症群		五十嵐ら (2001)
気分障害群 > 非臨床群		森田ら, (1998)
気分障害群 > 神経症群		五十嵐ら (2001)
気分障害群 > 老年期障害群		五十嵐ら (2001)
アルコール障害群 > 老年期障害群		五十嵐ら (2001)
アルコール障害群 ≡ 非臨床群		森田ら, (1998)
妄想型統合失調症群 > 非妄想型統合失調症群		Inadomi et al (2003)
-----		
統合失調症の初発群・再燃群・慢性群の間で有意差あり (森田, 2000)		
統合失調症者に対する一定期間の作業療法後は、前よりも出現頻度が低い (稲富ら, 1996, 1998)		
7カ国7~29歳の出現頻度は0~6.4%で、カメルーンのマウロが高く10.9% (濱野, 2007a)		
-----		
「>」と「<」は出現頻度の統計的有意差ありを、「≡」は有意差なしを示す。 森田ら (1998) はDSM-IV、五十嵐ら (2001) はICD-10による。		

1993) の場合、統合失調症者の黒色バウムで14%、色彩バウムで8%という報告もある (名島ら, 2001; 名島, 2004)。このように、「漏斗状幹上開」と「メビウスの木」は、描き手の病理との関連を示唆する知見はある程度積み重ねられている。ただし、「メビウスの木」は、子どものバウムでもしばしば生じること (青木, 1984; 中島, 2011, 154-155頁)、カメルーンの調査でも多く認められ、「自然に、しかも豊かな表情をもって描かれ」る (濱野ら, 2005, 濱野, 2007a)、といった指摘には十分耳を傾けるべきである。そもそも「メビウスの木」が鑑別のために創案された指標ではないこと、そして鑑別のために有用であるとする報告はあるものの、実際にこの指標が鑑別する力を有しているかは、まったく調査されていないことは認識しておくべきである。なお藤田 (1991) が事例研究で「メビウスの木」を論じ、濱野 (2007, 46-47頁) が「中核群」「周辺群」「疑似群」という下位項目を設けて、国外の数か所で得られたバウムを検討していることも紹介しておく。

ところで、元日本精神神経学会会長の臺弘は、「簡易精神機能テスト」にバウムテストを取り入れ、「つつぬけ画」というバウムを論じている (臺, 1999)。統合失調症者のバウムを陰性画と陽性画に大別し、「急性・再発不安定期にある患者は陽性画」、すなわち、幹上部が筒抜けになった「つつぬけ画」を描きやすいと彼は言う。この「つつぬけ画」は一視点とは数えず、山中の視点に包含されるものと考えた。詳細は臺の業績を参照されたい (臺, 2003a, 2003b; 臺ら, 2001など)。

## 2 岸本の視点

岸本寛史は、「バウムが被験者の心理的内空間を表すものと捉えるなら、被験者の心理的な内界と外界の間には、何らかの仕切り・境界・区別がある」との仮説をもち、幹先端処理を「バウムを描く際、もっともエネルギーを必要とするところ」であるために「被験者の脆弱性が反映されやすい部分である」と考えて、「幹の内空間が外空間と隔てられているか否かに注目」する独自の視点を報告した (岸本, 2002)。

彼は統制群と患者群との比較を行う中で、「開放型」(完全開放型, 閉鎖不全型, 先端漏洩型, 冠漏洩型を含む), 「閉鎖型」(冠型, 放散型, 基本型, その他の閉鎖型を含む), 「その他」からなる分類法と定めた。この類型は, 所謂「閉鎖型」「開放型」というこれまで曖昧だった点を, 説得力ある形で整理した重要な業績である。また, 藤岡らの視点を足掛かりに, 先述の山中と小林の視点を取り入れたものと考えられるので, 「類型派」との重なりが多い視点といえる。

岸本の視点をういた研究は, 短い期間のわりに多く報告されている(中島ら, 2004; 山口, 2006; 松浦ら, 2008; 児玉, 2009; 佐渡ら, 2009, 2012; 大倉ら, 2011a, 2011b; 富田, 2011; 岸本ら, 2012; 松下ら, 2012)。新田(2011)のように分類に修正を加えた試みもあるが, 今後の発展には臨床研究の積み重ねが大切となろう。

なお, 岸本は他所で, 幹先端処理の「開放型」が, 即, 描き手の病理を意味しないことを繰り返し強調している(岸本, 2008a, 2008b, 2011)。これは量的な研究における勇み足の解釈に警鐘を発するものである。

### 3 京都大学描画研究会の視点

山中康裕が主催していた京都大学描画研究会(以下, 京描研)は, 同大学心理教育相談室で蓄積してきたデータを一枚一枚丹念に見直して, 議論を重ねることで, 体験的理解の糸口を得ようとする取り組みをした(奥田, 2000; 松井, 2009)。ここでは京描研の試みと理解できる諸研究をまとめて取り上げることにする。それは2001~2002年の日本心理臨床学会大会における一連の研究発表(引用省略), 文科省科研費報告書(奥田ら, 2003)を通して, 『バウムの心理臨床』(山中, 2005)において結実した一連の業績である(中野, 2005a, 2005b; 奥田, 2005a, 2005b; 鶴田, 2005; 山川, 2005a, 2005b)。

彼らは, 「バウムをそのバウムの論理に沿ってみることに, そして「バウムを描く際に何が起きているかを問うこと」(奥田, 2005 a)を目的に, 幹先端処理から「バウムイメージを

体験的に想像しようとする, そうしたバウムへのコミットメントを通じてクライアントへのコミットメントを深めようとした(鶴田, 2005)。そして, 最初に描かれやすい幹の二本線の後になされなければならない幹上部への対処を, 「分化」という「幹の内実・エネルギーを何らかの方向づけをして処理すること」と, 「包冠」という「一定のエリアを形成することで先端を包んで処理すること」という2側面から捉えなおした(奥田, 2005a)。「分化」と「包冠」から幹先端処理を捉えなおした彼らの業績は, 他の視点にない卓見である。ただし「全体⇄部分」からするとやや部分を強調している感はある。

彼らは「分化」についての分類リストを提案してはいるが(奥田ら, 2003, 23頁), そもそも分類法の提唱を目的として研究しているわけではない。したがって, 後の研究において, 彼らの業績はよく引用されるものの, どの程度の研究がこの視点から行われたかを判断することは難しい。唯一, 吉田ら(2007)の報告にこの視点の影響が強く認められる。彼女は京描研の視点を発展させて独自の分類法を提案しているが, 今回は一つの視点とは数えず, 京描研に含まれると考えた。

なお, 京描研の視点は, 青木健次の影響も強く受けていること, そして一部の類型の命名に対して批判があること(岸本, 2010)は付け加えておきたい。

### 4 松下の視点

京描研と同じ流れを汲むだろう松下姫歌も, 新しい分類法を提案している。彼女は精神病院の臨床における幹先端処理の意義を論じた翌年(松下, 2005), 肥満児のバウム調査結果から独自の分類法を報告している(松下, 2006)。

その分類法は, 「幹先端の放射状枝での閉鎖」, 「幹先端開放+円形・雲形樹冠」, 「その他(幹と樹冠が一体となったもの, 幹上開, メビウスの木, 一線幹を含む)」の3項目からなる簡潔なものである。この報告のそもそもの論旨は, 得られたバウムを類型し, その類型から肥満児の心理的特徴を論じるものであるため, 分類法の提案を目的とするものではない。したがって,

表2 各視点の特徴のまとめ視点

属性 \ 視点	類型派				発達派		イメージ派			
	藤岡ら	青木	小林	濱野ら	吉川	中島	山中	岸本	京描研	松下
①類型の基準の明確さ	-+	+ -	+ -	+	-+	+	+	+	-+	+
②「全体⇄部分」のクリア	+ -	-+	-+	+	+	-+	+	+	+ -	+ -
③幹上部の部分的強調	-+	+	+ -	-+	-+	+	-+	-+	+	+ -
④類型(項目)の汎用性	+ -	+ -	-	+ -	+ -	+ -	-	+ -	-	-+
⑤子どもの発達的理解	+ -	-	-	+	+	+	-	-	-+	-+
⑥所謂「開放型」の理解	-+	-	+	-+	-	+ -	+	+	+ -	-+
⑦先行研究の充実度	+ -	+	+ -	-	+ -	-	+	+	-	-

この視点をそのまま用いた研究が本報告以外にないことは自然である。このシンプルな分類法は、上で整理してきた種々の類型をある意味上手くまとめたものではあるが、逆にあまりに大胆すぎるとも理解できるものである。

VI 各視点の特徴

上の3動向10視点は、立場や考え方によって、細分化も包括化も可能であろう。この点については、批判的な検討を待つしかない。各視点は研究内容のみならず、各研究者たちのオリエンテーションや活動領域とも深い関係があるはずで、熟読する際にはそこまで想いを馳せる必要がある。筆者らが把握できた論文は可能な限り引用したので、今後の研究の参考にしていきたい。

さて、それぞれの視点の特徴を簡潔に示すために、ここで7つの属性を定位し、評価する。評価は4段階(高い順に+, +-, -+, -)で行った。この評価の妥当性が問題視されるかもしれないが、個々の視点の特徴は浮かび上がらせるには十分であると筆者らは考えている。

7つの属性は次のように説明される。①明示された類型や指標の基準(定義)の明確さ、②筆者らが提案した幹先端処理の原則「全体⇄部分」を満たしているか、③先の原則は抜きにして、幹上部の理解を強調しているか、④提案している類型や項目は広範囲のバウムを評価できるか、⑤子どものバウム理解、あるいは発達的理解に長けているか、⑥臨床場面で時に重要

になる所謂「開放型」を評価できるか、⑦各視点に基づく報告された今日までの研究量。

評価結果は表2にまとめた。すべての評価結果が同じ結果になることはなく、個々の視点はそれぞれ独自の特徴を持っていると理解できた。ここより、現在までに提案されている幹先端処理の視点(分類法)の内どれを選択するかは、研究者の個性と研究テーマ如何ということになる。とはいえ、筆者らはある視点に基づく、まとまった研究がなされ、その結果、知見が集積されることを期待しないわけではない。しかしそれでは、幹先端処理の可能性が狭められてしまうとも危惧する。目下、2つ以上の視点(分類法)から検討する研究が望まれているのかもしれない。

VII 展望

以上、できる限り研究を引用したが、「幹上開」に関する研究や、幹先端処理を参考にした類型化の研究、幹先端処理に言及した研究はほとんど取りあげていない(山森, 2002; 近藤ら, 1999など)。必要に応じて参照されたい。

最後に、今後の研究という点で、視点の包括化、解釈仮説、描画プロセスについて論じる。

1 視点の包括化は必要か?

上の検討によって、幹先端処理には少なくとも10の視点があることが分かった。幾人かの研究者・臨床家は、それらを包括化することを求めるかもしれない。例えば、岸本と中島の視点を包括化できれば、説得力ある指標を使って、

幹先端処理の開閉と発達の検討の双方を検討しえると考えるだろう。筆者らも以前そのことを目論みはしたが（佐渡ら, 2010）, 現在, それは不可能であるという考えに至った。表2の結果が示すように, 各視点はそれぞれの哲学を有しているためである。視点の包括化は, 安易な折衷的視点を作るだけにとどまる危険があり, 各視点の臨床的有用性を減じさせるかもしれない。視点を包括化する方向よりも, 幹先端処理そのものを再考しつづける取り組みの方が, 実り多いように思われる。

## 2 解釈仮説

第1報によって, 「幹先端処理とは何か」についてはいくらか明確にできたが, 多くの臨床家が関心を寄せるだろう「幹先端処理は描き手のどのような心理的特徴を反映しているか」については, ほとんど触れてこなかった。つまり, 幹先端処理の解釈仮説についてである。

この点は, 本稿の射程と筆者らの力量を超えている, と言わねばならない。それを試みるためには, 「幹先端処理に王道といえる解釈仮説が存在するか」という根本から考え直さなければならず, 描画と状態像の間にある逆説的な関係（宿谷ら, 1969）をも考慮しなければならない。むしろ, 提唱40年以上を経ても一定の結論が得られていないことそれ自体が, 解釈仮説を打ち出すことの難しさを示しているのであろう。したがって, 先行研究のレビューとメタ的な検討によって一般的な解釈仮説を提示するには, 未だなお時期尚早なのである。

とはいえ, 解釈仮説に正面から取り組む研究は避けられなし, 避けるべきではない。先の京描研の業績は, 解釈仮説を確立するために重要な取り組みである。大山（2003）がこれらを「内在的な視点」からなされた「構造論的解釈」の研究と的確に評したように, じっくりとバウムの本性と向き合うような研究が必要である。もし調査データによって数量的に研究していくならば, 調査手続きに工夫を加えるなど, 研究手法から考えていくべきかもしれない<sup>註5</sup>。なお, 筆者らが知る限りでは, 諸外国で幹先端処理に着目した研究はほとんどない。わずかに, Avé-Lallemant（1996/2002, 2頁など）が樹

冠と幹との関係を「人格発展を象徴」する「木の<心臓>」と位置付けていることや, Sättdeli（1954）が幹と枝とのつながりに神経症傾向を読み取ろうとしていることは分かっている。しかし, いずれも「全体⇔部分」を満たしてはいない。

なお, 従来の研究は所謂「開放型」の理解を深める方向性に傾いていた印象がある。今後, 解釈仮説を構築していくのであれば, 臨床群であれ非臨床群であれ, 多くの描き手が表現する所謂「閉鎖型」をより吟味していく必要があるのではないだろうか。その際, 藤岡らが提唱した「冠型」「放散型」「基本型」の3類型に加え, 「幼型」が基盤になっていくだろう。筆者らとしては, 最初の3類型がなぜこうまでもバウムを上手に類型できるのか, に注目している。これらの類型が持つそれぞれの意味を詳らかにすることは, 幹先端処理の発展に欠かせない取り組みであると思われる。

## 3 描画プロセス

今後, 幹先端処理を改めて考え直す上で, 描画プロセスに着目すべきである, と筆者らは考えている。

描画プロセスを見守る過程で, 描き手が幹上部に差し掛かった時, 大きな意味を感じることがある。消しゴムで何度も消しては直すことをくり返したり, ハッと筆が止まったりすることに, 見守り手としては意味を感じずにはいられない。幹先端処理を理解する上で描画プロセスに着目することは, 藤岡らや山中をはじめ, 何人かの研究者が当初から言及している。「幹先端処理（に）苦勞している」という指標を設けて検討した報告もある（一谷, 1974; 一谷ら1975）。「表現とは, 描画に何が描かれているかということよりも, 描画がどのように描かれているかということと関係がある」（Koch, 1957/2010, 41頁）のであれば, 幹先端処理を描画プロセスも加味して考えていく必要があるだろう。現在までには, 幹先端処理をシンタグマティックに捉える取り組み（京描研の業績を参照）と, 幹先端処理の課題には描画の序盤に突き当たるという探索的な研究（佐渡ら, 2012）しかなされていない。



ここで再度、山中 (1976) が『メビウスの帯現象』を呈する場合、非常に不思議に思われることは、描いた当人は、この木の持つ奇妙さに全く気づいていない」と述べている点を強調したい。収集したバウムをただ眺め、開閉云々を論じて、相当綿密な仮説が無い限り、徒花に終わってしまうかもしれない。

## VIII おわりに

第一報では、幹先端処理とは何かを詳細に論じ、この第二報では、提唱以後の研究を大きく三つの動向から概観した。

本試みによって、幹先端処理の研究に一つの仮説的筋道を形作ることができたのであれば、本稿の目的は果たされたといえる。

## 註釈

- 1) 後に「幹端に関するもの」は「幹先端処理」に、「ツキヌケ」は「上縁出」などと名称が変化している (青木, 1980b)。また、指標名は青木自身によっても、青木の分類法を採用した研究でも、理由が記されないまま変更している場合があるため、結果の理解には注意を要する。また、ここで引用していない報告以外でも、青木の視点を取り入れたと推測される研究は多々ある。それらを含めると、青木の視点による研究はさらに数を増やすことになる。なお、後の青木の業績では、幹先端処理についてたびたび言及しはするものの、類型に関しては、その後独自のものを提唱するようになった。そこでは幹先端処理があまり重要視されなくなったように読み取れる (青木, 1984, 1985, 2004など)。
- 2) 小林は論文の中で、指標による分析は「バウム・テスト整理票」(国吉ら, 1980) に従ったとある。しかし、「バウム・テスト整理票」にこれらの幹先端処理の指標はなく、小林独自のものであるようだ。こうした引用は、後進が指標の意味を辿れなくさせる。
- 3) これら以外にも、中尾ら (1974) で、「幹だけの時」、「抽象型のバウム」、「キノコ型」、「枝だけを描いたもので、その枝が基本型の一部として認められる場合」、「基本型ではあるが、模式化され、抽象傾向を帯びている場合」、「草本科のものを描いた時」の類型が、中尾ら (1979) で「描けない場合」の類型が示されている。
- 4) 第一報において、「上に行くほど太くなる幹」は幹先端処理の指標とは考えないとした。しかし、

ここは山中の言及にしたがって記述してある。なお、山中は、Kochの「先にゆくほど太くなる幹 (dicker werdnder Stamm)」に言及しているが、筆者らが調べた限り、正確にはKochはそのように記述してはいない。似た意味で、「oben zunehmender Stammdicke」(Koch, 1957/2010, 167頁) とはあり、「先太りの枝」が「Dicker werdende Äste」の訳である。

- 5) 山中 (1976) は、安永浩の「ファントム理論」を「漏斗状幹上開」と「メビウスの木」の解釈部で言及している (安永, 1992a, 1992b参照)。両バウムが安永のいう意味での「パターン逆転」で説明しえるかは今後詳細に議論すべきではある。しかし、全体よりも部分が体験上支配的になるがために (つまり「パターン逆転」で) 所謂「開放」のバウムになる、という解釈は、ある意味でこうしたバウムの本質を射ているかもしれない。仮にそうであれば、「全体 ⇄ 部分」は幹先端処理を規定する役割だけでなく、臨床的有用性を裏付ける原則としても機能するだろう。ただし、「パターン逆転」のみで開放したバウムすべてを説明できないことも事実であり、また本来の「パターン」は体験を説明する概念であることは注意しなければならない。

## 文献

1. 青木健次 (1980a). バウムテストの臨床的活用—新実施方法による新たな知見を加えて. 京都大学学生懇話室紀要, 10: 59-81.
2. 青木健次 (1980b). 投影描画法の基礎的研究 (第1報) —再検査信頼性. 心理学研究, 51 (1): 9-17.
3. 青木健次 (1982). 投影描画法の基礎的研究 (第2報) —態度統制実験. 京都大学学生懇話室紀要, 12: 55-74.
4. 青木健次 (1984). バウム・イメージの多様性と人格—分裂病者の特徴とその表現心理学的理解. 京都大学学生懇話室紀要, 13: 21-36.
5. 青木健次 (1985). バウム表現の発達とその表現心理学的考察—投影描画の構造特性をふまえて. 京都大学学生懇話室紀要, 14: 1-27.
6. 青木健次 (1988). バウムテスト—バウム画を表現心理学から読む. 臨床精神医学, 17 (6): 979-987.
7. 青木健次 (2004). バウム・テスト. In; 氏原寛・亀口憲治・成田義弘・東山敏久・山中康裕 (編) 心理臨床大辞典 改訂版. 培風館, pp. 556-561.
8. 青木健次・北村李軒・三好暁光・佐藤正保 (1980). バウムテストの臨床的研究 (第3報)—武道部学生のバウムテストと大学生の予防精神医学. 臨床精神医学, 9 (7): 623-631.
9. Avé-Lallemant, U. (1996). *Baum-Tests*. Mun-

- chen und Basel: Ernst Reinhardt. 渡辺直樹・坂本堯・野口克巳 (訳) (2002). バウムテスト—自己を語る木: その解釈と診断. 金剛出版.
10. 藤岡喜愛・吉川公雄 (1971). 人類学的に見た, バウムによるイメージの表現. 季刊人類学, 2 (3): 3-28.
  11. 藤田裕司 (1991). バウム・テストにおける表現病理 (3)—「メビウスの木」について. 障害児教育研究紀要, 13: 17-24.
  12. 福島章・中村俊哉・川崎晶子 (1984). 児童のバウムテストの比較文化的分析. 安田生命社会事業団研究助成論文集, 19: 135-144.
  13. 濱野清志 (研究代表) (2007a). 樹木画テストの発達指標の普遍因子と文化による固有因子の抽出への試み. 平成15~18年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 (A): 15203028) 研究成果報告書. [各部分の担当著者は省略]
  14. 濱野清志 (2007b). 三線描画コミュニケーションの試み樹木画研究からの着想. 臨床心理研究: 京都文教大学心理臨床センター紀要, 9: 29-37.
  15. 濱野清志 (2008). 東南アジアの樹木画にみる人間観. 心理学ワールド, 40: 13-16.
  16. 濱野清志・杉岡津岐子 (2005). 樹木画と風土—自然植生と表現. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 111-139.
  17. 原幸一・中西恵美 (2000). 知的障害をもつ自閉症者のバウムテスト. 心理臨床学研究, 18 (4): 390-395.
  18. 一谷彊 (1974). バウムテストについて (IV). 心理測定ジャーナル, 10 (11): 6-11.
  19. 一谷彊・津田浩一・西尾博・岡村憲一 (1975). 投影法での反応と養育環境との関係についての比較研究—バウムテストとP-Fスタディを中心に. 京都教育大学紀要 Ser. A, 46: 23-46.
  20. 一谷彊・林勝造・国吉政一・小林敏子・津田浩一・山下真理子 (1986). バウムテストによる生涯的発達研究 (I)—樹冠と幹の関係指標の発達の傾向と精神的加齢現象の検討. 京都教育大学紀要 Ser. A, 69: 53-68.
  21. 五十君啓泰・森田喜一郎・河村直樹・平井聡・森圭一郎・前田久雄 (2001). バウムテストによる精神疾患の鑑別診断の可能性. 九州神経精神医学, 47(3-4): 129-136.
  22. Inadomi, H., Tanaka, G. and Ohta, Y. (2003). Characteristics of trees drawn by patients with paranoid schizophrenia. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, 57(4): 347-351.
  23. 稲富宏之・森田喜一郎・原村耕治・倉田秀明・河村直 (1996). 数量化を用いた作業療法評価の試み—樹木画 (バウム) の経時的観察. 作業療法, 15 (4): 351-357.
  24. 稲富宏之・森田喜一郎・井上ひとみ・中村桂・原村耕治 (1998). 1日における作業療法の回数が精神分裂病者に与える効果—3年間にわたるバウムテストによる補助的評価を試みて. 作業療法, 17 (2): 133-142.
  25. 岩川淳・岩川真弥 (1993). 幼児の樹木画の研究 (1)—社会性の発達とバウム描画特徴. 和歌山信愛女子短期大学 信愛紀要, 33: 77-84.
  26. 岩城操・吉川公雄 (1978). 現代の青年期女性にみられるイメージ形成の特徴—バウムテストによる人間生態学的研究3. 京都女子大学自然科学論集, 10-11: 1-87.
  27. 岩城操・吉川公雄 (1980). 現代の青年期男性にみられるイメージ形成の特徴—バウムテストによる人間生態学的研究7. 京都女子大学自然科学論集, 12: 37-74.
  28. 岩城操・中尾舜一・吉川公雄 (1982). イメージ形成の地域特性2—北海道礼分島の小学生に見られる北方系の有意性について (バウムテストによる人間生態学的研究10). 京都女子大学自然科学論集, 14: 21-52.
  29. 岩城操・中尾舜一・吉川公雄 (1983). イメージ形成の地域特性4—北海道東藻琴の小学生にみられる北方系の有意性について (バウムテストの人間生態学的研究12). 京都女子大学自然科学論集, 15: 31-79.
  30. 川崎晶子 (1984). バウムテストにみる日米少女の自己像. 青年心理, 44: 141-147.
  31. 岸本寛史 (2002). バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群. 心理臨床学研究, 20 (1): 1-11.
  32. 岸本寛史 (2008a). なぜバウムテストをするのか. In; 堺・南大阪地域活性化のための拠点としての心理臨床センター報告書, pp.4-14.
  33. 岸本寛史 (2008b). 投映法とナラティブ. ロールシャッハ法研究, 12: 51-58.
  34. 岸本寛史 (2010). 読む 臨床家のためのこの1冊 (55)—"Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel" (Karl Koch). 臨床心理学, 10(3): 470-473.
  35. 岸本寛史 (2011). 指標の意味と既述のレベル—バウムテストにおける幹先端処理の検討から. 臨床心理身体運動学研究, 13(1): 19-29.
  36. 岸本寛史・中島登代子 (2012). 役者の心は開かれている?—バウムテストにおける幹先端処理に着目して. 臨床心理身体運動学研究, 14(1): 19-28.
  37. 小林敏子 (1990). バウムテストにみる加齢の研

- 究—生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討. 精神神経学雑誌, 92(1): 22-58.
38. 小林敏子 (2000). 高齢者の心をバウムテストを通して理解する. In; 小林敏子 (編) 高齢者介護と心理. 朱鷺書房, pp. 61-76.
39. 小林敏子・山下真理子 (1982). 老年期における心理状況について—バウムテストによる検討より (老人性精神障害に関する研究 その2). 大阪市弘済院附属病院研究報告, 昭和57年度調査, 1-33.
40. Koch, K. (1957). *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. 3.Auflage.* Bern: Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト [第3版]—心理の見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房.
41. 児玉恵美 (2009). バウムの幹先端処理に示される境界の側面の研究—日本版境界尺度との関連から. 九州ルーテル学院大学心理臨床センター紀要, 8: 27-32.
42. 近藤春香・鈴木壯 (1996). 怪我しやすい運動選手のバウム画表現からみた特徴. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 20 (2): 111-119.
43. 近藤春香・鈴木壯 (1999). バウム画の表現特徴による負傷頻発選手の類型化—そのパーソナリティ特性と怪我発生の競技状況との関連. 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 46 (2): 219-223.
44. 窪田幸子 (1991). オーストラリア・アボリジニの木のイメージ—バウムテストの人類学的考察. 国立民族学博物館研究報告別冊, 15: 365-378.
45. 久保和男・吉川公雄 (1983). 思春期特性の年間推移—バウムテストによる人間生態学的研究15. 帝国学園紀要, 9: 91-98.
46. 国吉政一・林勝造・一谷彊・津田浩一・斎藤通明 (1980). バウム・テスト整理表. 日本文化科学社.
47. 松井華子・千秋佳世・古川裕之・山本有恵 (2009). 風景構成法における彩色についての研究. In; 桑原知子 (代表) 臨床の知を創出する質的に高度な人材養成 研究開発コロキウム. 大学院教育改革支援プログラム (大学院GP) 平成二十年年度研究成果報告書, pp. 96-105.
48. 松下姫歌 (2005). 精神病院での心理臨床におけるバウムの意味について. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 248-275.
49. 松下姫歌 (2006). バウムテストに見られる肥満児の心理的特徴. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 55: 219-226.
50. 松下優衣・石田弓 (2012). アレキシサイミア傾向と身体の捉え方との関連. 広島大学心理学研究, 12: 179-196.
51. 松浦さほ・鈴木壯 (2008). スポーツ競技者のバウムに関する基礎的研究—幹先端処理について. 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 56 (2): 159-166.
52. 道又利 (1993). 精神分裂病者の「退行」に関する投影法的研究—病者のバウム・テストの検討を通じて. 岩手医学雑誌, 45 (2): 165-194.
53. 宮崎忠男・藤井純子・小林淳 (1987a). 精神分裂病者のバウムテストの因子分析—3因子抽出の場合. 心理臨床学研究, 5 (1): 44-50.
54. 宮崎忠男・藤井純子・小林淳・望月秋一・上島求 (1987b). 精神分裂病者のバウム・テストにみられる性差について. 心理測定ジャーナル, 23 (9): 14-21.
55. 宮崎忠男・藤井純子・小林淳 (1989). 精神分裂病者のバウムテストの因子分析—4因子抽出の場合. 心理臨床, 2 (1): 39-49.
56. 水田一郎・井上洋一・嘉手川伸子 (1998). 摂食障害の危険因子および予後予測因子の研究. メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告書, 10: 119-123.
57. 水田一郎・井上洋一・嘉手川伸子 (2000). 摂食障害の危険因子および予後予測因子の研究—第三報. メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集, 12: 121-126.
58. 森田喜一郎・中村ひとみ・原村耕治・中村桂・宮平綾子・倉掛交次 (1998). バウムテストの経時的数量化の試み—精神疾患別の評価. 精神科治療学, 13 (10): 1249-1256.
59. 森田喜一郎・山口浩・森田恵史・山本正史・龍博昭・前田久雄 (2000). 分裂病者におけるバウムテストの経時的変動—初発, 再燃の検討. 久留米医学会雑誌, 63 (3-5): 79-85.
60. 森谷寛之 (1983). 棒づけ効果に関する実験的研究—バウム・テストを利用して. 教育心理学研究, 31 (1): 53-58.
61. 長野文典・吉川公雄 (1983). バウム類型からみた青年期女性のYG性格検査—バウムテストによる人間生態学的16. 帝国学園紀要, 9: 99-106.
62. 名島潤慈 (2004). 心理アセスメントにおける黒色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢 (1). 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17: 143-156.
63. 名島潤慈・増田勝幸 (1993). バウム・テスト. In; 上里一郎 (編) 心理アセスメントハンドブック. 西村書店, pp. 223-238.
64. 名島潤慈・原田則代・横田周三・森田裕司・増

- 田勝幸・植村孝子 (2001). バウムテスト. In; 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック 第2版. 西村書店, pp. 186-197.
65. 中島ナオミ (1983). 幼児のバウムテスト (第2報). 大阪府立公衆衛生研究所研究報告 (精神衛生編), 21: 13-23.
66. 中島ナオミ (1984a). 幼児のバウムテスト. 心理測定ジャーナル, 20 (5): 13-18.
67. 中島ナオミ (1984b). 幼児のバウムテスト (第3報)—樹型分類と項目. 大阪府立公衆衛生研究所研究報告(精神衛生編), 22: 21-32.
68. 中島ナオミ (1986). バウム・テストについて. 障害児の診断と指導, 4 (2): 24-25.
69. 中島ナオミ (2008a). バウムテストにおける樹形の分類. 関西福祉科学大学紀要, 11: 123-137.
70. 中島ナオミ (2008b). バウムの発達. 臨床心理学, 10 (5): 668-673.
71. 中島ナオミ (2011). バウムテストの発達指標に関する研究. 甲子園大学博士論文.
72. 中島ナオミ・塚口明・松本和雄・家常知子(1982). 幼児のバウムテスト—樹型分類を中心にして. 大阪府立公衆衛生研究所研究報告 (精神衛生編), 20: 29-41.
73. 中島登代子・長岡由紀子・蔵原建彦 (2004). スポーツ競技場面の特異性に関する研究 (1)—バウムの幹先端処理を通して. 臨床スポーツ心理学研究, 1: 41-50.
74. 中村延江・田副真美・石関ちなつ・原節子・桂戴作・岡安大仁 (1986). 思春期における心理テストの検討. 思春期学, 4 (1): 79-85.
75. 中村俊哉・福島章 (1985). 青年期心性の心理測定学的研究 (第3報)—投影法テストの分析. 上智大学心理学年報, 9: 17-31.
76. 中野祐子 (2005a). 事例にみる幹先端処理. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 208-221.
77. 中野祐子 (2005b). 幹先端処理の実際例. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 198-207.
78. 中尾舜一・吉川公雄 (1974). バウムテストの人間生態学的研究1—医学部進学過程学生の調査から. 久留米大学論叢, 23 (2): 89-129.
79. 中尾舜一・吉川公雄 (1975). バウムテストによる人間生態学的研究1—医学部進学過程学生の調査から (承前). 久留米大学論叢, 24 (1): 41-63.
80. 中尾舜一・吉川公雄 (1978). 幼稚園児のイメージ形成の分化—バウムテストによる人間生態学的研究4. 久留米大学論叢, 27 (1): 53-86.
81. 中尾舜一・吉川公雄 (1979). 幼稚園児のイメージ形成の成長—バウムテストによる人間生態学的研究5. 久留米大学論叢, 28 (1): 21-45.
82. 中尾舜一・吉川公雄 (1980). 医学部進学過程学生における7年間隔に見られるイメージ形成の変動—バウムテストによる人間生態学的研究8. 久留米大学論叢, 29 (2): 99-132.
83. 中尾舜一・吉川公雄・岩城操 (1981). イメージ形成の地域特性1—大阪と九州における大学商学部男子学生の相違 (バウムテストによる人間生態学的研究9). 久留米大学論叢, 30 (1): 67-92.
84. 中尾舜一・岩城操・吉川公雄 (1982). イメージ形成と地域特性3—奄美大島の小学生にみられる南方系の有意性について (バウムテストの人間生態学的研究11). 久留米大学論叢, 31 (1): 57-87.
85. 中尾舜一・岩城操・吉川公雄 (1983). イメージ形成の地域特性5—北海道中央部の小学生にみられる特徴について (バウムテストの人間生態学的研究13). 久留米大学論叢, 32 (2): 129-171.
86. 中尾舜一・吉川公雄 (1986). イメージと行動—バウムテストによる人間生態学的研究17. 久留米大学論叢, 35 (2): 181-208.
87. 中尾舜一・吉川公雄 (1987). イメージと行動2—いろいろな環境要素から見た行動解析 (バウムテストによる人間生態学的研究18). 久留米大学論叢, 36 (1): 1-38.
88. 新田侑実 (2011). 溶解の体験とバウムにみる自我境界の在り方. 京都学園大学 人間文化学部学生論文集, 9: 66-77.
89. 小川芳子 (1988). 集団実施のBaum Testにみる学生気質 (第2報)—S63年度新入生の特徴. 共立薬科大学研究年報, 33: 9-17.
90. 小川芳子 (1995). 樹木画テスト17年の経年変化. 共立薬科大学研究年報, 40: 5-17.
91. 小川芳子・大丸三恵・大森郁子・早川千恵子 (1986). 集団実施のバウムテストにみる学生気質 (第1報). 共立薬科大学研究年報, 31: 17-33.
92. 小川芳子・黒須美智子・斉藤亜矢子 (1997). 樹木画テストからみる心理学的性差. 共立薬科大学研究年報, 42: 47-55.
93. 奥田亮 (2000). 描画のよみとりに関する考察. 佛教大学学生相談室年報, 9: 3-14.
94. 奥田亮 (2005a). 本研究のねらい. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 144-151.
95. 奥田亮 (2005b). 幹先端処理において体験されうること—幹先端が描き手に何を引き起こすか. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 182-197.

96. 奥田亮・鶴田英也・山川裕樹・中野祐子・安立奈歩・西堀智香子・松山真弓・鳴岩伸生 (2003). バウムテストの幹先端処理に関する研究. In; 皆藤章 (研究代表) 臨床場面における描画法の理論的・実証的研究—画像データベースシステムの「視点探索ツール」開発とその発展的利用を通じて. 平成12-14年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (2): 12410034) 研究成果報告書, pp. 11-35.
97. 大倉朱美子・岡本三希子・山中康裕 (2011a). 当院糖尿病治療教育入院患者におけるバウムの一つの特徴—「幹の離脱 (Intermittent Trunk)」への着眼. 心理臨床学研究, 28 (6): 799-804.
98. 大倉朱美子・岡本三希子・岡本元純・山中康裕 (2011b). 糖尿病治療教育入院患者に出現したバウムテストの指標「幹の離脱」の臨床的意義. 心身医学, 51 (10): 902-909.
99. 大山泰宏 (2003). 心理臨床アセスメントとしての描画法. 児童心理学の進歩 2003年版. 金子書房, pp. 29-48.
100. 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2009). バウムテストの幹先端処理に関する基礎的研究—大学生のバウム画より. 心理臨床学研究, 27 (1): 95-100.
101. 佐渡忠洋・鈴木壯 (2010). 吉川公雄によるバウムテスト研究の一考察—バウムテスト文献レビュー (第三報). 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 59 (1): 217-229.
102. 佐渡忠洋・鈴木壯・田中生雅・山本真由美 (2012). バウムの描画プロセスに関する研究—バウムはどこから描かれ, 幹はどのように構成されるのか. 臨床心理身体運動学研究, 15 (1): 59-68.
103. 坂口守男・朝井均・朝井忠・大家尚文・朝井知・メ崎いづみ・弓庭喜美子・岡本五百合 (2005a). 地域在住高齢者のバウムテスト (II)—長寿者のバウムテストの追跡調査. 大阪教育大学紀要 (第III部門), 54 (1): 63-76.
104. 坂口守男・朝井均・朝井忠・大家尚文・メ崎いづみ・弓庭喜美子・岡本五百合・志波充・郭哲次・篠崎和弘 (2005b). 地域在住高齢者のバウムテスト. 大阪教育大学紀要 (第III部門), 53 (2): 83-93.
105. 坂口守男・朝井均・朝井忠・大家尚文・弓庭喜美子・志波充・貫志素子 (2006). 地域在住高齢者のバウムテスト (IV)—非認知症群における年齢間の比較. 大阪教育大学紀要 (第III部門), 55 (1): 107-116.
106. 佐藤正保・青木健次・三好暁光 (1978). 大学生に集団的に実施したバウムテストの量的分析の試み (第1報). 臨床精神医学, 7 (2): 207-219.
107. 澤田和重・内田裕之・宮下久子 (1992). 脳器質性疾患者のバウム表現について. 岐阜県立下呂温泉病院・温泉医学研究所年報, 19: 52-56.
108. Sivapakianathan, L. (web site). Baum forms and their meanings: a case study. ([http://mssubashinik.tripod.com/sivaalayam/psych1\\_2.htm](http://mssubashinik.tripod.com/sivaalayam/psych1_2.htm)) [Jan. 20, 2013.]
109. 曾我昌祺 (1989). バウムテスト. 心理臨床, 2 (3): 258-261.
110. 曾我昌祺・島田修・市丸精一 (1980). バウムテストにおける類型的アプローチの実際の妥当性について—MPT, MAS, CAS, YG性格検査を測度として. 住友病院医学雑誌, 7: 35-45.
111. Städeli, H. (1954). *Der Baumtest nach Koch als Hilfsmittel bei der medizinisch-Psychologischen Pilotenselektion und aehnlichen Verfahren*. Zurich: Inaugural-Dissertation.
112. 杉岡津岐子 (2010). バウムと文化. 臨床心理学, 10(5): 704-705.
113. 宿谷幸次郎・石田達男・丸山普・望月節子・小林保子・岩井寛 (1969). 状態像と絵画表現の間のパラドクシカルな意味について. 芸術療法, 1: 41-46.
114. 滝浦孝之 (2011). 在宅健常高齢者のバウムの特徴—文献的検討. いわき明星大学人文学部研究紀要, 24: 97-113.
115. 富田美穂 (2011). 糖尿病の血糖コントロールが不十分な患者の心理に関する研究—バウムテストの検討. 臨床心理学, 11 (6): 860-868.
116. 綱島啓司 (1992). 描画テストの基礎的研究—バウム指標とY-G尺度. 川崎医療福祉学会誌, 2 (2): 87-96.
117. 鶴田英也 (2005). 本研究の目的と位置づけ—バウムとの関わりの諸相. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 152-181.
118. 臺弘 (1999). 早期の治療的介入と慢性病態の回復—特に分裂病について. 精神薬療基金研究年報, 31: 1-9.
119. 臺弘 (2003a). 日常診療のための簡易精神機能テストの実際. 精神科治療学, 18 (8): 965-973.
120. 臺弘 (2003b). 精神機能の基本的指標—簡易テストの工夫. 精神科治療学, 18 (12): 1455-1458.
121. 臺弘・斎藤治・三宅由子 (2001). 日常診療のための簡易精神機能テスト (第3報)—分裂病者のバウム・テスト. 精神医学, 43 (7): 737-744.
122. 山口智 (2006). 想像上の仲間に関する研究—二つの発現開始時期とバウムテストに見られる特徴. 心理臨床学研究, 24 (2): 189-200.

123. 山川裕樹 (2005a). バウムへのコミットメントについて. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 239-243.
124. 山川裕樹 (2005b). 幹先端処理の重要性. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 22-238.
125. 山森路子 (2002). バウム・テストと心理面接からみたバセドウ病患者—アトピー性皮膚炎との比較. 箱庭療法学研究, 15 (1), 31-42.
126. 山中康裕 (1976). 精神分裂病におけるバウム・テストの研究. 心理測定ジャーナル, 12 (4): 18-23.
127. 山中康裕 (1980). コメント. In; Koch, R.・林勝造・国吉政一・一谷彊 (編) バウム・テスト事例解釈法. 日本文化科学社, p. 202.
128. 山中康裕 (1995). 箱庭療法の適応と禁忌. 精神科治療学, 10 (6): 627-630.
129. 山中康裕 (1999). 芸術・箱庭療法. In; 氏原寛・成田善弘 (編) カウンセリングと心理療法—心理治療 (臨床心理学1). 培風館, pp. 134-151.
130. 山中康裕 (2003). こころと精神のはざままで2—バウムテスト論考. 臨床心理学, 3 (2): 239-245.
131. 山中康裕 (2005). バウムにみる臨床的かつ哲学的思惟. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 12-28.
132. 山中康裕・矢間三鶴 (1976). 精神分裂病およびその近縁群のバウムテストに特徴的にみられる「漏斗状幹上開 (funnel shaped apical opening)」と「メビウスの帯現象 (Moebius stripe phenomenon)」について. 精神神経学雑誌, 78(7): 523-524.
133. 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) (2005). バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社.
134. 安永浩 (1992a). ファントム空間論—分裂病の論理学的精神病理 (安永浩著作集1). 金剛出版.
135. 安永浩 (1992b). ファントム空間論の展開 (安永浩著作集2). 金剛出版.
136. 吉田美悠紀・松下姫歌 (2007). 青年期の友人関係とバウムテストに見られる特徴との関係. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 6: 113-128.
137. Yoshikawa, K. (1976). Cross-cultural studies on the image formation in the inhabitants of Borneo and Singapore in relation to the age: Human ecological studies on Baumtest (Tree Drawing Test), 2. 生理生態, 17 (1-2): 613-618.
138. Yoshikawa, K. (ed.) (1985). *Cultural ecology through tree test*. Tokyo: Tokai University Press.
139. 吉川公雄 (1978a). BAUMTEST—ボルネオにおける研究. In; 加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫 (編) 社会文化人類学 (今西錦司博士古稀記念論文集). 中央公論社, pp. 335-396.
140. 吉川公雄 (1978b). バウムテストにみる女子大生の性意識と性行動—ペッチングとコイタスについて. 現代性教育研究, 30: 87-102.
141. 吉川公雄 (1978c). その応用への一つの道—バウムテスト. In; 人間生態学—生物としての認識からの出発. 東海大学出版会, pp. 110-156.
142. 吉川公雄 (1985). バウムテストからみた子どもたち. In; 河合隼雄 (編) 子どもと生きる. 創元社, pp. 20-42.
143. Yoshikawa, K., Chan, L.-W. Y and Yoshikawa, H. (1983). Behavior and cognitive development of Singapore children: a pilot study: Tree-Test (BAUMTEST) of human ecology, 14. 帝国学園紀要, 9: 77-90.
144. 吉川公雄・緒方正美・竹林淳・前川彦右衛門・林宏輔・鎌谷正博・田中耕一 (1979). バウムテストによる疾病の臨床生態学的研究. 大阪府医師会医学雑誌, 12: 195-228.

#### 付記

本稿は2013年, 日本心理臨床学会第32回秋季大会におけるポスター発表を加筆したものである。